

仏教伝来の道を旅する・シルクロード編

8期 篠島益夫

3年3回にわたる「仏教誕生の地と伝来の道をめぐる旅」は今回のシルクロード編をもって終わりました。思いを懐いてから3年の月日を要した事になりました。第一回「仏教誕生の地を旅する・インド仏跡を巡る」は「やまざと vol-31」で第二回「仏教伝来の道を旅する・ヒマラヤ・カラコルム・パミールを越えて西域南道」は「やまざと vol-33」で寄稿させて頂きました。今度の「やまざと」では第三回を報告致します。

2018年5月19日～20日・西安・兵馬俑博物館・

青龍寺・大慈恩寺など

19日関空をAM10時に出て6時間余りで曇天の西安に着いた。人口800万人の陝西省の省都で、城門や城壁が中心部で目立つ古都、市内の鐘楼見物、夕食を愉しみ、翌20日は好天の中、兵馬俑博物館1・2・3号館で圧倒された後、これを作らせた始皇帝陵へ、大きさだけを実感してから、804年に入唐した空海が密教を師の恵果から学んだ青龍寺へ。ここは跡地だけだった場所に1980年代に西安市と日本の四国4県が協力して空海・恵果の大きな記念堂や庭園を整備して1000本の桜を植樹して中国仏教会に引き渡されて維持されている。恵果と空海の真言密教はその後、中国には残らず日本で残り、中国ではチベット族中心にインドからの密教にチベット族の独自信仰が混合したチベット仏教（ラマ教）が根付いている。日本僧が入唐して伝えた経典は全て漢訳経典であり、その漢字を使って自国の文字としていた訳だから中国・朝鮮半島・日本・台湾・ベトナムなどは漢字文化圏であると言える。

西安では初唐に国禁をおかしてまでも17年に及ぶ中央アジアとインドへの求法の旅を続けて帰還した玄奘三蔵の国営の訳経場がその後大慈恩寺として残り、経典を収蔵したという大雁塔は唐代から現在まで残っている。玄奘の弟子の慈恩大師が興した唯識学の法相宗も入唐した玄奘門下の道昭により日本に伝えられている。



西安市
大慈恩寺の
大雁塔
20180520 撮影

5月21日～22日・西安市内・敦煌莫高窟・

玉門漢・陽関など

21日朝は旧西安の城壁・安定門などを散策してから西安空港から敦煌に飛んで、鳴砂山と月牙泉に向かう。月牙泉は敦煌の都市化で湖水面積が減っていた。鳴砂山は砂丘のように見えているが岩稜の山に砂が被った状態で流動砂漠のように形も風景も変わらない、ここは甘粛省の西端にあたる地で昔から西域からの異民族侵入に悩まされたシルクロードの拠点都市。

22日は莫高窟見学から始まる。撮影は外部OK、内部は禁止。著名な窟は殆ど見る事が出来たが、大乘仏教の仏像が主ではあるが阿弥陀仏像は少なかった。

清朝末に窟の隔壁の奥に別の窟が発見されて極めて多量の貴重経典、論書、仏像などが発見されたが、此処の管理を任されていた道教の王道士がイギリスの西域仏教遺跡探検家スタインやドイツのル・コック、フランスのプリオ、若干遅れて日本の本願寺22世大谷光瑞師が率いる大谷探検隊などに売り渡してしまった。西欧では19世紀からインド学、東洋学が流行り、仏教の歴史的研究も西欧で進み、インド、中央アジア、中国、日本は取り残された。特に漢訳経典に頼り、鎖国も続いた日本の仏教研究は西欧に完全に遅れていた。日本では本願寺22世門主の若き大谷光瑞師がヨーロッパ在学中にこれを知り、日本の仏教研究の近代化を図ろうとして大谷探検隊を1902年（明治35）～1914年（大正3）に3次にわたり派遣して日本の古い仏教史観の近代化を進めた。（拙著：「大谷探検隊と二楽荘の夢」に詳述）



敦煌市

莫高窟外観

20180522 撮影

辛亥革命前の混乱期の清朝が気がついた時には多くが失われ莫高窟の壁画も一部ははぎ取られて国外に持ち去られ中国からは逸散してしまった。それ等は現在、大英博物館、本願寺の龍谷ミュージアムなどで見られる。貴重資料等を売り払い金儲けをした王道士はその後、処刑された。

我々をガイドしてくれたのは莫高窟研究員の日本の美人の朱さんで、莫高窟美術図鑑も買わされてしまった。この日は莫高窟の大スクリーンでの解説から窟のガイド付き案内で印象が残っているのは22、29、16、17、57、45、96、148窟である。此の地は古代から中国と西域との天山南北の2路と西域南道の分岐地点に当り、異民族侵入の多い地域でもあり、どの王朝も厳重な関所を設けた。今回は玉門関（ホータン川で採れる玉が通る関所と言う意味もあるとか）と陽関を見学、いずれも一夜の風で地形の変わる流動砂漠地帯ではなく石、土、砂の混じったゴビタン砂漠地帯で水の確保しやすい場所に有った。詩人王維の有名な詩が自然に浮かぶような場所だ。西域探検を敢行した漢の張騫の事績が誇張されていた。



敦煌市 玉門関 20180522 撮影



敦煌市 陽関 20180522 撮影

元二の安西に使用するを送る詩 王維 作
 渭城朝雨潤輕塵 い城の朝雨、輕塵を潤す
 客舎青青柳色新 客舎青せい、柳色新たなり
 勸君更盡一杯酒 君にすすむ更に尽くせ一杯の酒を
 西出陽關無故人 西の方陽関を出れば故人なからん
 新訳經典を多くもたらした玄奘三蔵
 玄奘三蔵は唐の国禁を破って629年に密出国して西域とインドに仏教經典を求め645年に帰還した。往路はトルファン盆地を拠点に強い勢力を誇った高昌国王の麴文泰に厚遇を受けて人足、荷駄、

資金（金や絹織物）を充分補充して、麴文泰王の力の及ぶ南路のクチャから天山を越えて北路に切り替えて西突厥やサマルカンド、バーミヤンからヒンズークシュを越えてカシミールへ、そして南下してインドへ。長大なコースながらも途中の諸侯の支援を取り付けながら旅と經典収集を続けた。帰路は高昌国が唐に滅ぼされており、今度は唐が強大な吐蕃国（チベット国）と結んでいたため其の勢力圏を辿り、インドからカシミール、パキスタンのインダス川を遡り、カラコルムのフンジュラブ峠付近を越えてタシュクルガンから西域南道のホータンに出た。しばし此処に留まり、唐の太祖に手紙を出して密出国の弁明をしたところ、太祖は大いに喜び、迎えまで出すという安全確認後に敦煌を経て西安に帰還している。657部の經典や多数の仏像を中国に将来して唐の太祖の肝いりで訳教所（現在の大慈恩寺）を設けて、此処で残る生涯を訳経に励んだ。玄奘訳の般若心経は今も多く読経され、著作「成唯識論」は法相宗の依拠する論書の一つとなっている。

23日～24日・敦煌博物館・高昌国古城
 朝から敦煌博物館に、此処では莫高窟の実物再現や生活史の立体再現展示が多く、結構愉しめた。



莫高窟第45の再現・中央は釈尊で周りには弟子と守護の二天王 20190523 撮影 博物館

トルファンへの移動は高速鉄道（新幹線）である。敦煌から新幹線の駅までバスで70分かかる、駅に着いたら、駅に入るのに荷物検査&パスポート検査、改札では切符&パスポート、ホームに行くには重いスーツケースが有ってもEVもエスカレーターも我々には使わせない。階段脇にスロープがあり、スーツケースを引きずって階段で4階のホームまで運ぶ、途中でスーツケースを放したら下に落下して人災間違いなしだ。誰の為のエスカレーターか？電車の乗り口で、またもや切符&パスポートだ、人手のかかるテロ対策なのか？

この新幹線は甘肅省蘭州から新疆ウイグル自治区ウルムチまでの路線である。車内のスピード表示を見ると最高速でも150kまで、おまけに駅での停車時間が長い。敦煌からトルファンの車窓からは沢山の油井が見える。ウイグル自治区はタクラマカン砂漠同様中国の資源と宝の山である。



スロープ付階段で荷揚・敦煌駅 20180523 撮影

新快速並み「すしずめ新幹線」で漸くトルファンに着いたら、また荷物&パスポート検査で、駅から工事中の凸凹歩道を重いスーツケースを引きずって2k程離れたバスまで。

トルファンはウイグル自治区でウイグル人が多いので駅には銃持ちの兵隊があちこち集まって駄弁っていた。自治区の主席は必ず共産党員で副主席は必ずウイグル人との話だったが、副主席は飾り物にすぎないというひそひそ話。モンゴル、チベット、ウイグル、チワン族、回族という大きな民族自治区を抱えて漢族の支配と多民族の被支配民という関係の固定化はこの時代には難しい筈、アメリカのような合衆国ではない点も多民族と言っても社会が違う。中国が多民族国家として経済的、政治的、人権扱いに成功したら世界で立派なモデルになるだろうが、公安と軍隊と共産党が威張り散らす今の様子からは期待薄である。この日の夕食はトルファン郊外のぶどう農家の庭先で、トルファンは特にブドウ生産農家が多い。のんびりした息抜きのひと時だった。



アトラス織の民族衣装で歓迎
トルファンの農家 20180523 撮影

24日はトルファン本命の高昌国古城を電動車で廻る、広いので主なコースを順番に廻り、めぼしいところは下りてガイドの説明を聞く。崩れかけた部分も多いが建物は形を留めているものも多い。玄奘がインドへの往路に立ち寄り引き止められつつも数十日を過ごし、説法も行ったという記録も玄奘が帰国後に纏めた「大唐西域記」に出てくる。玄奘は往路の旅の成功原因となる資金、人脈、人足、荷駄、通過国の国王への紹介状などをこの国の麴文泰王から準備して貰って成功することが出来た。麴文泰と交した「帰路には必ず高昌国に立ち寄り」との約束は玄奘の帰国前に高昌国が玄奘の母国である唐に滅ぼされて実現しなかった。

ウイグル自治区に入ると、途端に公安（日本の警察）と検門所が増える。街でもぶどう畑でも「民族融和」の看板が目立つ、それほどその逆の事件が多いからだろう。



トルファン高昌古城・大仏寺跡 20190524 撮影

トルファンは古城の他、ゼベリス千仏洞など仏教遺跡が多く、第三次大谷探検隊の吉川小一郎はトルファンを拠点に2年近くかけて主要地域をことごとく探査して収集物を145頭のラクダ隊に載せて、パオトウ—張家口—天清—神戸と運んだ。彼が神戸に到着した1914年（大正3）7月10日には探検隊の盟主である本願寺22世の大谷光瑞は既に辞任しており、この時をもって大谷探検隊の第三次活動は終わった。光瑞師は教団の革新を目指しながら、仏教研究の近代化（考古学、発掘学など近代科学的手法を取り込んだ仏教史学）の為の西域探検隊の実行、日露戦争支援への教団の過大な出費と膨大な戦時国債の買い入れ、探検収集物と近代仏教僧育成の為の神戸の岡本村天王台での二楽荘建設などが絡んだ本願寺と教団の財政破綻の責任を取ったのであった。

25 日～26 日・ウルムチ国際バザール・紅葉山公園・ウイグル自治区博物館・天山天池

私達が 23 日敦煌を愉しんでいる頃、年間降雨量が十数ミリと言われるトルファン方面がかかっていない豪雨に見舞われていたらしい。24 日に高昌国古城の見学を済ませて、ゼベリスク千仏洞に向かったが「豪雨で道が崩れて行けない、戻れ」という公安の指示。中国公安は自分達の都合で観光地への入場を突然規制する。前年も西域南道のチャリクリクで泊り、砂漠の米蘭遺跡に行く予定だったが、前々日に公安から「そのツアー待った」通告をされて現地旅行社が掛け合ってもダメ、私の中央仏教学院時代の仏教史の先生がこの発掘の中国との共同事業に参加した事があるので期待していたが没となり、ホータンで予定外の連泊をして日程調整したが、今回の災害は本当らしい。火焰山も太陽の位置が悪くて景観はダメだった。中国ツアーでは想定外が多過ぎるのは日常だ。

25 日はウルムチ市内の高台の紅葉山公園から始まったが、遠くに天山が見えるくらい。植物は春榆の白い花が歩道を白く染めていた。

ウルムチから天山に向かって 2000m ほど登った天山天池（てんしゃんあまいけ）は途中の道路には雪も残って残雪の天山と大きな天池がセットに見える中国流リゾート地という感じで、人が多いのは上高地並みだが、感心するほどの景観ではなかった。多分、山が遠すぎて山が池に映るほどの見映えもないからだ。

2017 年の西域南道ツアーで中国に入って初めての町タシュクルガン（パミール高原のタジク人の町）からウルムチまで 1500k 以上をガイドしてくれたウルムチ在住の趙戒利さんをガイド仲間。今回の我々のガイドのムハンマド氏の知人でもある事が分り彼がスマホで趙さんに連絡してくれた。私もメール連絡でウルムチの予定を趙さんに伝えていたので、今晚ホテルを訪ねる予定だったとの事で 2017 年 10 月 26 日のウルムチ空港以来、半年振りでウルムチのホテルで再会した。



ウルムチ
天山天池

20180526
撮影

彼女は翌年 2019 年秋に初めての兵庫を旅したいと言うので、私がプランを作ってメールと電話でやり取りして手配、2018 年 11 月 8 日～12 日まで 3 泊 4 日の兵庫の旅にウルムチから出かけてきてくれた。新疆大学日本語科出身なので日本には知人も多く東京で過ごしてから帰国して行った。彼女は「天山の花の旅」を企画して、「手配はウルムチの旅行社ですの方が日本で手配するよりも安い」と言ってます。彼女はウルムチの旅行社に勤務して、中国では日本人をガイドすることが多く、日本に中国人ツアーを連れてくる時は中国人をガイドしています。

26 日はウルムチ空港から西安、青島経由で関空へ戻りました。往路に比べて乗換が増えて 12 時間ほど時間が掛かりました。

「やまざと」で今回を含めて 3 回のレポートをさせて頂いた「仏教の旅」シリーズはこれで終わりました。



六甲山森づくりボランティア
フォレスター松寿・10 周年記念誌
20190501 出版 20190910 撮影

2009 年から六甲山（東灘地区）で活動中の「森づくりボランティア・フォレスター松寿」を始めてから、今年で 10 年を迎えましたが、こんなに長く継続出来るのも一緒にやって頂ける皆様のお蔭です。

山や高原の旅が続けられるのも学生時代以降もお付き合いさせて頂いているワンゲル OB の皆様のお蔭に違いありません。

皆様に誠に感謝、感謝です。 終わり